



Title	フランス語の直説法半過去形と談話的時制解釈 : 高橋 (2016)の仮説に対する検討
Author(s)	高橋, 克欣
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97328
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語の直説法半過去形と談話的時制解釈

- 高橋 (2016) の仮説に対する検討 -

高橋克欣

1. はじめに

筆者は高橋 (2021)(2022)(2023) において、主節との同時性をあらかず時況節である *quand* 節や *comme* 節の中でフランス語の直説法半過去形 (以下、「半過去」とする) が用いられる場合の特徴について、これらの時況節の談話解釈上の機能と半過去の解釈メカニズムに着目して考察を重ねてきた。

それらの考察をつうじて、時況節の中で用いられる半過去の談話解釈における特徴を明らかにするためには、まずは主節において用いられる半過去のさまざまな用法を談話解釈の観点からもういちど見直してみる必要があることをあらためて強く認識するに至った。

そこで本稿では、かつて筆者が高橋 (2016) において半過去の解釈に関して提示した仮説を再検討し、文学作品から収集した用例の分析を中心として考察を行い、仮説の修正案を提示することを目指す¹。

本稿の構成は次のとおりである。まず 2 節で談話解釈における半過去のはたらきに関する高橋 (2016) の仮説を振り返り、検討を要する点を確認する。それをふまえ、3 節では文学作品からの引用例に基づき半過去と同時性の問題について考察し、4 節では高橋 (2016) で提示した仮説の修正案を示す。続く 5 節では半過去の解釈における認識枠が言語文脈以外によって設定される場合について論じ、6 節では本稿のまとめを行い今後の課題に言及する。

2. 談話解釈における半過去のはたらきに関する高橋(2016)の仮説

高橋 (2016) では、非自立的な時制であると考えられる半過去が担う事態の定位機能を、次のような形で仮説として提示した。

(1) 高橋 (2016) における仮説

半過去は過去時制であり、談話時空間内の過去に位置づけられる事態を表す。時間軸上に直接事態を位置づける「投錨」とは異なり、半過去による「係留」は相対的な操作である。半過去が安定した解釈を受けるためには、半過去によって表される事態を部分的な要素として含み持つ全体としての役割を果たす認識枠が解釈上設定される必要がある。この認識枠にはさまざまな種類があるが、言語文脈上構築される認識枠のことを「母時空間」と呼ぶ。半過去の「係留」操作は、当該の事態を過去時に位置づけるだけ

¹ 出典が明記されていない例文は筆者の作例である。また、出典が明記されていない訳文は筆者によるものである。

でなく、当該の事態と母時空間との間に「部分 - 全体」の関係が成立することによって実現される。(高橋 (2016)からの引用)

この仮説は、時況節である *quand* 節の中で用いられる半過去の解釈に対する説明としては妥当であると考えられるが、半過去全般の解釈に対する妥当性を考慮するとき、この仮説にはさらに検討を要する点がいくつかある。

そのひとつは、「母時空間」の概念の妥当性である。この仮説では、半過去の安定的な解釈において必要とされる認識枠のうち、言語文脈上で構築されるものを「母時空間」と呼んでいる。そして、当該の半過去によって表される事態と母時空間との間に、「部分 - 全体」の関係が成立するとしている。

ところが、半過去の用法を説明する際の典型的な例文であると考えられる次のような例において、母時空間はどのようなものであるのかという点が問題になる。

(2) *Paul est sorti. Il pleuvait.*

ピエールは外出した。雨が降っていた。

単純に考えれば、第1文で用いられている複合過去 *est sorti* 「外出した」によって表されるできごとが母時空間が設定される際の引き金になると考えることができそうだが、仮にそのように考えるとしても、「外出した」という瞬時的なできごとと *pleuvait* 「雨が降っていた」という事態との間に見いだされる関係は、「外出した」のほうが部分的であり、「雨が降っていた」のほうを全体と見なすほうが自然ではないかという指摘がなされることが想定される。つまり、半過去は全体に対する部分を表すという仮説には問題があるのではないかということである。

高橋 (2016) の半過去に関する仮説の問題点としてもうひとつ考えられることは、言語文脈以外の要素が十分に考慮されていない点である。この仮説では言語文脈上に構築される認識枠をとりわけ「母時空間」として規定しているが、いうまでもなく、半過去の解釈に関与する要素は言語文脈に限定されるわけではなく、話し手と聞き手の共有知や共有体験、話し手と聞き手が存在する発話状況などが半過去の解釈において重要なはたらきをもつことがある。談話解釈の観点から時制のはたらきを説明しようとするならば、言語文脈だけを特別扱いするのではなく、共有知識や共有体験、発話状況など、談話解釈に関与するさまざまな要素を視野に入れた理論を構築することが必須となる。

そこで3節では、まず「母時空間」の概念の妥当性について考えるために、一般的に半過去の特性として考えられている「同時性」の問題を論じることにしたい。

3. 半過去と同時性

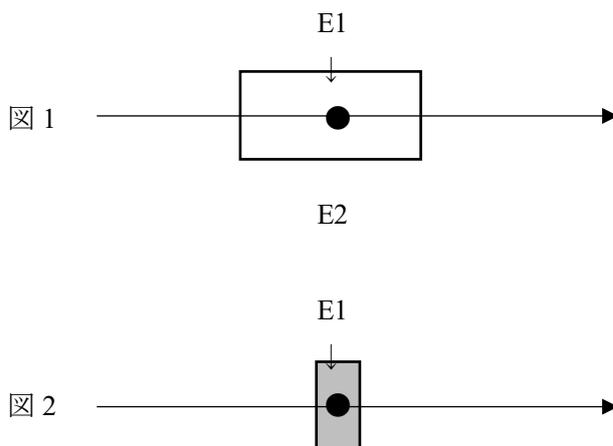
半過去が同時性をあらわす、という場合に言及される典型的な例文は先ほど示した (2)

のようなものである。

(2) Paul est sorti. Il pleuvait.

ピエールは外出した。雨が降っていた。

このような例における半過去のはたらきを説明するために、東郷 (2011) では次のような図が示されている。



(図 1, 図 2 はいずれも東郷 (2011) からの引用)

一般的には、図 1 のように、黒丸の E1 が複合過去 (*est sorti*) を表し、長方形の E2 が半過去 (*pleuvait*) を表すと説明される。そして、未完了時制である半過去は、他の完了時制によって表される事態との同時性を表すことになる。しかしながら、半過去によって表される事態はかならずしも時間的な長さを持つとは限らないため、図 2 のように E2 は幅のせまい四角で表現されるべきであると東郷 (2011) では説明されている²。

この説明、すなわち半過去が常に時間的な長さを持つ事態を表すとは限らないのはそのとおりであるが、半過去が常に他の完了時制との同時性を表すとは限らない点を高橋 (2016) の仮説の中でどのように扱うか、という点をさらに考える必要がある。

たとえば、次の例における半過去を見てみたい。

(3) Elle baissa la tête. Alors il lui demanda si elle pensait au mariage. Elle reprit, en souriant, que c'était mal de se moquer. - « Mais non, je vous jure ! » et du bras gauche il lui entoura

² 東郷 (2011) では、図 2 の四角が「窓」の比喻を用いて説明されている。半過去が表しているのはあくまでも窓から見えている屋外の景色の一部であり、その景色の全体を眺めることはできない、すなわち半過去によって表される事態の始点と終点は問題にならないということである。

la taille ; elle *marchait* soutenue par son étreinte ; ils se ralentirent.

(Gustave Flaubert, *Un cœur simple*.)

彼女は項垂れた。すると、男は彼女に結婚する気はないかと訊いた。彼女は微笑みながら、からかつてはいけないと言った。

「からかつてなんかいない、誓っているんだ！」

男は左の腕で彼女の胴を抱え、彼女は抱えられるがままに歩いて行った³。

(3) の例における半過去 *marchait* 「歩いていた」が、その直前の単純過去 *entoura* 「(彼女の腰に) 手を回した」というできごととの同時性を表すという解釈は不自然であり、むしろ単純過去 *entoura* に続く行為を未完了的に表現したものと解釈されるべきである。ちなみに、*marchait* が、それに後続する単純過去 *se ralentirent* 「(歩みを) 緩めた」との同時性を表すという解釈も不自然である。

さらに、次の (4) のように、半過去が連続的に用いられ、しかもそれらの半過去が継起的な解釈を受ける例もある。

(4) Quand elle avait fait à la porte une gémflexion, elle *s'avançait* sous la haute nef entre la double ligne des chaises, *ouvrait* le banc de Mme Aubain, *s'esseyait*, et *promenait* ses yeux autour d'elle.

(Gustave Flaubert, *Un cœur simple*.)

教会の戸口で跪礼をすると、フェリシテは天井の高い身廊の下、二列に並んだ座席の間を進んで行った。彼女はオバン夫人の腰掛けを開けて、そこに座ると、辺りに目を遣った⁴。

(4) では、*s'avançait* 「(前に) 進んで行った」、*ouvrait* 「開けていた」、*s'esseyait* 「座っていた」、*promenait* 「(視線を) 泳がせていた」というように、4つの異なる動詞の半過去が連続的に用いられているが、これらの行為がすべて同時に展開していたという解釈ではなく、それぞれの行為が継的に捉えられているという解釈が自然である。

さらに、次の (5) のように半過去によって章や節が開始されることもめずらしいことではない。

(5) Le téléphone portable programmé pour le réveiller à 5 h 30 *vibrait* de toute sa coque sur la table de nuit. Sous la surface ondoyante de l'eau, Rouget de Lisle le *regardait* de ses yeux globuleux. Lundi. Il n'avait pas vu passer le dimanche. Levé trop tard, couché trop tôt. Un jour sans. Sans envie, sans faim, sans soif, sans même un souvenir. Rouget et lui avaient

³ 訳文は、西村勇 (2014) から引用した。

⁴ 訳文は、西村勇 (2014) から引用した。

occupé leur journée à tourner en rond, le poisson dans son bocal, lui dans son studio, déjà dans l'attente de ce lundi qu'il détestait.

(Jean-Paul Didierlaurent, *Le liseur du 6h27*.)

携帯電話は、ベッド脇のテーブルの上で朝五時半に振動し、ギレンを起こすよう設定されていた。水面が波立ち始めると、その下にいるルジェ・ド・リールは、突き出た目でじっと彼のことを見つめる。月曜日だ。日曜日はどこへ消えたのか。起きたのが遅かったし、床に就いたのは早かった。だから、ないも同じになってしまった。なんの欲望も湧かなかった。腹も減らず、喉も渴かない。そしてなんの思い出もない一日だ。

日曜のルジェ・ド・リールとギレンは、どちらも一日、ただ円を描くように動き回るだけだった。金魚のほうは鉢の中で、ギレンはアパルトマンの部屋の中で。頭の中は早くも月曜日のことを思い、すっかり憂鬱になっていた⁵。

(5) のような場合には、展開中の事態を表す半過去を章や節の冒頭で用いることにより、整合的な解釈を可能にするための物語世界がそこに存在することを想起させ、半過去はその物語世界の時空間において展開中の事態を表していると解釈されることになる。その結果として、読み手は突然物語世界の現場に居合わせているかのような臨場感を味わうことになる。

(3), (4), (5) における半過去の用例から分かることは、半過去は常に他の過去のできごととの同時性を表すとは限らないということ、そして事態の継起的な展開を表すために半過去が連続して用いられることがあるということである。

つまり、言語文脈上で半過去が安定的な解釈を受ける場合において、半過去が他の完了時制との同時性を表すことは必須条件であるとはいえず、あくまでも半過去の解釈を安定させるための要素のひとつが「同時性」であると考えられるべきであることが分かる。

4. 仮説の修正

ここで、(1) に示した高橋 (2016) の仮説を、東郷 (2011) における半過去のイメージをとり入れた形で修正するならば、次のような説明が可能であると考えられる。

(6) 高橋 (2016) における仮説の修正

半過去が解釈可能になるためには、半過去によって表される事態の一部を射程に入れた認識枠が設定される必要がある。談話解釈上、この認識枠と半過去によって表される事態とが関係づけられることで半過去の「係留」操作が実現される。この認識枠はさまざまな談話解釈資源を用いて設定されるものであり、この認識枠が過去の時空間に設定される場

⁵ 訳文は、夏目大 (2017) から引用した。

合に、当該の事態が過去時に位置づけられることになる。

高橋 (2016) で提示した仮説 (1) とその修正案 (6) のちがいは次の点にある。まず、(1) で用いられていた「母時空間」という概念を用いることをやめた点である。これはもともと、*quand* 節において半過去が用いられる場合の解釈メカニズムを説明するために導入した概念であった。しかしながら、他の時況節において用いられる半過去やさらには主節で用いられる半過去など、広く半過去全般の用例を観察してみると、母時空間といえるようなものが設定されなければ半過去の解釈が成立しないとはかならずしもいえず、この母時空間の概念は、やや一般性に欠けるものであると判断せざるをえない⁶。

(1) と (6) のちがいは、認識枠の概念とそれに関連する「部分 - 全体」のとらえ方にも見られる。(1) では認識枠について、「半過去が安定した解釈を受けるためには、半過去によって表される事態を部分的な要素として含み持つ全体としての役割を果たす認識枠が解釈上設定される必要がある」としていた。ところが、半過去の解釈において必要とされる認識枠は全体としての役割を果たさなくてもよいため、(6) では「部分 - 全体」の関係性に関する記述を削除した。

なお、(6) では「半過去によって表される事態の一部を射程に入れた認識枠が設定される必要がある」と規定されており、半過去は当該の事態が部分的にとらえられていることを表すが、これは (1) で考えられていた「部分 - 全体」の関係性とは異なるはたらきである。

ちなみに、(6) における認識枠は、いわゆる視点に相当するものと考えられることができるが、視点と同様に、この認識枠は談話が進行するにしたがって移動することが可能であり、この認識枠の中で当該の事態がとらえられることにより、結果的にそれぞれの事態が眼前において展開中であるという印象を与えることになる。また、この認識枠が完了を表す他の過去時制によって設定される場合に、半過去が他の過去時制との「同時性」を表すことになる。

(6) における認識枠は、東郷 (2011) の図 2 における縦長の四角に相当するが、過去のできごとを表す他の完了時制 E1 によって言語文脈上に設定されるとは限らないことに留意する必要がある。

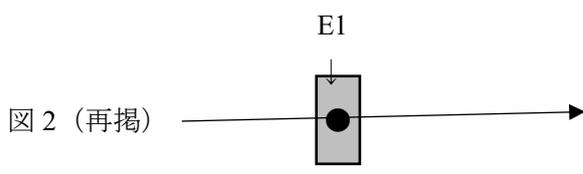


図 2 (再掲)

⁶ これは本稿の主旨から離れてしまうが、談話解釈において母時空間の設定を必要としたうえで、当該の半過去が「部分」の役割を果たし、母時空間が「全体」の役割を果たすことは、半過去自体の特性というよりも、時況節 *quand* の特性であると考えべきである。このことについては、稿をあらためて論じることとしたい。

そこで次の5節では、高橋 (2016) の仮説に関して検討を要するもうひとつの点である、言語文脈以外の要素が関与して半過去の解釈における認識枠が設定される場合について考察する。

5. 半過去の解釈における認識枠が言語文脈以外によって設定される場合

すでに述べたように、半過去の解釈は言語文脈上の要素のみと関与的であるわけではない。次の (7) の例では、話し手と聞き手が共有する過去の情報を参照することで半過去の解釈が可能となる。

(7) *Quand est-ce que, déjà, elle allait chez le médecin ? Je ne me rappelle plus.*

彼女はいつ医者に行ったのだったっけ？もう覚えていないんだ。

(Berthonneau et Kleiber (1993) からの引用)

(7) において半過去が用いられた文に後続する文から明らかなように、(7) において半過去が解釈される際には、明示的に言語化された先行文脈上に存在する要素を参照するのではなく、*déjà* のはたらきにより、話し手と聞き手が共有していると考えられる知識にアクセスすることが求められる⁷。

なお、(7) では「彼女が医者に行った」のは過去の時空間に定位されると解釈されるべきごとであるが、*déjà* が半過去とともに用いられる場合には、当該の事態が必ずしも過去の時空間に属するとは限らない。次の (8) のように、発話時点すなわち現在においても成立する事態が半過去を用いて言及されることもあり、このような半過去は、発話時点において獲得済みであり聞き手が話し手と共有していると考えられている知識にアクセスすることで解釈が可能となるのである。

(8) *Comment s'appelait-il, déjà ?*

彼は何ていう名前だったっけ？

(7) や (8) のような半過去の解釈における認識枠は話し手と聞き手の共有知識を援用して設定されると考えられ、当該の事態が過去の時空間において直接定位されるわけではない。

また、Tasmowski-de Ryck (1985) が指摘するように、発話状況において知覚され、言語化されない要素を参照して解釈が可能となる半過去の用例も存在する。

⁷ 定延 (2010) が「情報のアクセスポイント」という概念を用いて日本語の「た」の解釈について論じているのも、これと同種の議論であると考えられる。

(9) (激しい物音と揺れに驚いた相手に対して)

Oh rien, il *fermait* la porte.

ああ何でもないよ、彼がドアを閉めたんだ。

(Tasmowski-de Ryck (1985) からの引用)

(9) の例では、先行する言語文脈は存在しないが、話し手と聞き手が存在する場において双方が知覚した非言語的な情報である激しい物音や揺れを参照することで、当該の半過去の解釈が可能となる。このような半過去の解釈における認識枠は、発話状況において設定されると考えることが可能である⁸。

6. まとめと今後の課題

本稿では、主節において用いられる半過去の談話的時制解釈について、高橋 (2016) において提示した仮説を再検討する形で考察を行った。

まず、高橋 (2016) の仮説において導入された「母時空間」という概念の妥当性について検討を行った。母時空間は、半過去によって表される部分的な事態に対する全体のはたらきを担う談話時制解釈上の概念であるが、半過去の用例全般の解釈メカニズムを説明する際に必須の概念であるとは判断しがたく、「部分 - 全体」という関係性ととも仮説から削除することにした。

そのかわりに、半過去全般の解釈に必須の要素として、「認識枠」の概念を用いることとした。認識枠の設定に際しては、言語文脈に限らず、発話状況や共有知識、共有体験などに属するさまざまな談話解釈資源が参照されることを確かめた。

また、文学作品からの引用例にもとづき、半過去の特性として論じられる「同時性」について検討を行った。半過去が、他の完了時制によって表される過去の事態との同時性を表す場合が多いことはたしかに事実であるが、これは、本稿における鍵となる概念である「認識枠」が完了を表す過去時制によって設定される場合に見られる特性であり、他の完了時制や半過去によって表される事態との同時性を表さない半過去の用例、物語の冒頭で用いられる半過去の用例もあり、このような半過去の解釈においては他の完了時制に依存せずに認識枠が設定され、場合によって談話の進行にしたがって認識枠が移動することもあることを確かめた。

今後の課題として、「認識枠」の概念をさらに精緻化することがあげられる。4 節において述べたように、本稿における「認識枠」の概念は視点の概念に相当するものと考えられることができるが、視点の概念自体が十分に自明なものとはいえないのと同様に、「認識枠」の概念も、その設定のなされ方、移動のしくみ、他の要素との関係など、談話解釈上明らかにす

⁸ あるいは、このような場合には、話し手と聞き手の共有体験を参照して半過去が解釈されると考えることもできる。

べきことは少なくない。

本稿では主節における半過去の用例を考察対象としたが、将来的には時況節や関係節において用いられる半過去についても多くの用例の観察および分析を行い、談話解釈上で半過去が見せるさまざまな特性を明らかにしていきたい。

最後に、本稿のテーマから離れてしまうが、現在筆者が関心を寄せている問題のひとつとして、Chat GPT に代表されるような生成 AI における時制の取り扱いがどのようになっているか、というものがある。

たとえば、本稿の執筆時点である 2024 年 5 月現在、Chat GPT に対して「*quand* 節を用いて、『私たちが森の中を散歩していたとき、一頭の熊に出会いました』という文をフランス語に訳してください。」という指示を与えると、次のようなフランス語文が出力される。

(10) ?*Quand nous nous promenions dans la forêt, nous avons rencontré un ours.*

(10) では前置された *quand* 節の中で半過去が用いられており、あらためて言及するまでもなく、これは半過去の使用制約に関する古典的な問題をふくみ、適切な文脈に置かれなければ不適切であると判断される文である。

生成 AI の技術的進歩には目を見張るものがあり、いずれは改善される問題であると推測することができるが、少なくとも現状においては生成 AI の回答をそのまま適切なものとして受け取ることができない点にどのように対応すべきであるか、言語学的な観点および教育的な観点からの検討が必要な問題といえるのではないだろうか。

今後はこれらの問題について多数の用例を詳細に分析したうえで考察を重ね、人間の時間認識とその言語化のあり方という言語認知科学的に意義深い問題に関して、さらに理解を深めることを目指したい。

参考文献

Anne Marie Berthonneau et Georges Kleiber (1993) Pour une nouvelle approche de l'imparfait :

l'imparfait, un temps anaphorique méronomique, *Langages*, 112, pp.55-73.

Liliane Tasmowski-de Ryck (1985) L'imparfait avec et sans rupture, *Langue française*, 67, pp. 59-77.

定延利之 (2010) 「た」発言をおこなう権利『日本語/日本語教育研究』1, pp. 5-30.

高橋克欣 (2016) 『「こと」の認識「とき」の表現 - フランス語の quand 節と半過去』京都大学学術出版会.

高橋克欣 (2021) 「談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム - 談話的時制解釈の観点からの分析 - 」『時空と認知の言語学X』言語文化共同研究プロジェクト 2020 : pp.11-19.

高橋克欣 (2022) 「時況節の位置と談話解釈上の機能 - quand 節と comme 節の分析 - 」『時空と認知の言語学XI』言語文化共同研究プロジェクト 2021 : pp.11-18.

高橋克欣 (2023) 「談話解釈における時況節 alors que 節の機能」『時空と認知の言語XII』言語文化共同研究プロジェクト 2022 : pp.20-29.

東郷雄二 (2011) 『中級フランス語 あらわす文法』白水社.

訳文の出典

ジャン＝ポール・ディディエローラン (著)・夏目大 (訳) (2017) 『6時27分発の電車に乗って、僕は本を読む』ハーパーコリンズ・ジャパン.

ギュスターヴ・フローベール (著)・西村勇 (訳) (2014) 『純な心』東京図書出版.